

米原万里（よねはらまり）

1950年生まれ。元ロシア語同時通訳。95年、『不実な美女か貞淑な醜女か』（新潮文庫）で読売文学賞、97年、『魔女の1ダース』（新潮文庫）で講談社エッセイ賞、2002年、『嘘つきアーニヤの真っ赤な真実』（角川書店）で大宅賞、03年、『オリガ・モリソヴナの反語法』（集英社）で文化村ドゥマゴ賞を受賞。近著に『真昼の星空』（中央公論新社）などがある。



綴りと発音

作家 米原 万里

現代日本語には、基本的には聞こえるとおりに綴る、という原則がある。これに基づいて旧仮名遣いは駆逐され、拘る作家は今や絶滅危惧種となっている。また、あれこれの語をどう表記し、どう読むべきか、常用漢字表（公用文、法令、新聞、放送など一般の社会生活における漢字使用の目安として、昭和五十六年十月に内閣告示された漢字一覧）から漏れた漢字（表外字）の読み方、綴り方はどうすべきなのか、常用漢字表にはあるものの、そこで許された発音以外の発音をされている文字の音（表外音）をどう表記すべきなのか、放送局や新聞社の現場ではじゅう紛糾している。それを解決するために、文部科学省傘下に文化審議会国語部会（平成十三年までは国語審議会）があるし、NHKにも新聞各社にも学識者を招いた用語委員会が設けられている。しかし、そこで取り決めたこともあつという間に現状に合わなくなる。その場しのぎになっているのだ。

例えば、「餃（表外字）子（表外音）」は、ほとんどの中華料理屋の献立表にあるとおり、そのまま記しているものか、いや外来語だから「ギョウザ」とすべきなのか、いやいや外来語といったって、北京語では「チャオズ」と聞こえるんだし、もうほとんど日本人の日常食になっているから「ぎょうざ」と書くべきではないか、いやいやいや発音とおりならば「ギョーザ」としなくてはならないじゃないの、という具合である。

一見単純明快な発音とおりのものが、混乱の最大要因なのだ。発音には個人差、地域差があるし、変化もしやすい。しかし綴りは一度決められると一定期間

変わらない。差がどうしようもなく開いたときに、なし崩し的に綴りが発音に追隨していく。どこかの権威ある委員会や辞書がそれを追認するのだが、しばらくすると、また発音の方は綴りから離れていく。イタチごっこは際限ない。

それは漢字という意味を担う文字をもった宿命とも言える。音を表すことを任務とする仮名による綴りは、いくら変わっても構わないという暗黙の了解ができてしまった。

英語に見られるように、表音文字しかもたない言語においては、そうはいかない。時を経るほどに、綴りと発音は無関係と言えるほどにかけ離れてしまう。それでも、彼らは決して、発音に合わせて綴りを変えようなんて発想はしない。そんなことをしたら、綴りが担っている意味を失ってしまう、と考えるからだ。例えば、ほぼサイコロジと発音され psychology と記われ心理学と訳される語は、綴りのおかげで、その中にギリシア語のプシケー psyche（心）とロトス logos（学）を読み取ることができて、語の意味をより把握しやすく覚えやすくしているのだから、と。

つまり英語を初めとしてヨーロッパの言葉における文字は、表音文字とは名ばかりで、実は正確に音を表してはいないのだ。語の綴りが歴史と意味を、発音が現在を各々分担している。その証拠に発音記号なるものがある。

日本語の仮名は文字であるような、発音記号であるような中途半端な存在であるために、混乱に拍車をかけているのだらう。